



虫の目、鳥の目 — 地域研究とアジア図書館の役割

岩井美佐紀

カンボジア国境に接するメコンデルタ・ロンアン省の開拓村で二〇〇三年から定点調査を続けている。ここは南北デルタの政策入植者を受け入れて一九九一年に形成された行政村であるが、二〇〇〇年以降近隣各省から土地を購入して移住した世帯や日雇い労働者が流入している。このような流動社会の人口統計は、治安に責任をもつ村の公安の住民登録台帳が唯一の公的資料となるが、公安が作成した手書きの住民台帳は村在住の数世帯の情報のごっそり抜け落ちていたり、すでに離村して所在不明の世帯があったりと、全く当てにならないかった。諦めかけていたところ、二〇〇五年末

に保健省が行った母子健康関連の悉皆調査に基づく全村統計データが村の診療所に保存されていることがわかり、ようやく全村の人口および家族構成が把握できたという経緯がある。もちろん、そのまま使用することは不可能な代物ではあるが、マイクロレベルの実態把握には必要不可欠な基本情報を提供してくれる。

このような現地調査を行う研究者にとって、メソレベルの地方(省や県)やマクロレベルの全国の統計は、自身の調査村の一般的な特質を理解するうえで極めて重要なツールである。近年、地方行政組織が統計

年鑑や地誌などを積極的に刊行している。私が調査しているロンアン省も統計年鑑を発行している。しかし残念ながら、本図書館には所蔵されておらず、他省の統計も系統的に所蔵されているとは言いがたい。ベトナムの出版事情を考えれば、地方の統計や地誌を網羅的に収集するのは難しいと十分承知しているが、一九九〇年代以降、外国人による農村調査が可能となり、ベトナム地域研究も「地方の時代」に入った現状を考えれば、少なくとも省レベルの統計資料の充実を早急に図る必要性は高い。

また、これに関連して、以下の点を考慮する必要がある。近年ベトナムにおいてフィールドワークに基づく民族誌、宗教文化などの分野も含めたモノグラフィなどの研究業績が蓄積されている。その主な成果は、末成道男編『ベトナム文化人類学文献解題—日本からの視点』(東京外国語大学アジア・アフリカ文化研究所、二〇〇九年)で紹介されている。一方で、欧米留学を終えたベトナム人研究者が専門分野の著作を英文で著すなど、ベトナム研究が急速にグローバル化している。ベトナム国内でこれまで三回(一九九八年、二〇〇三年、二〇〇八年)開催されてきた国家レベルの「ベトナム学国際会議」をはじめ、海外では、オーストラリア国立大学によるVietnam Updateやヨーロッパ域内のベトナム研究機関で組織されるEuro-Vietなど、ベトナムに特化した研究会議が定期的に重ねられ、ベトナム地域研究の業績が確実に蓄積されている。アメリカでも二〇〇六年からカリフォルニア大学出版局から*Journal of Vietnamese studies*という学術雑誌が毎年三回刊行され始めた(執筆時点で本図書館は未購読)。学位論文のモノグラフィや科研調査報告書、国際研究会議のプロシーディングス(未刊分)などは基本的に寄贈によるため入手が難しいのであるが、本図書館で丹念に収集・所蔵していただければ、世界の研究成果を共有する一助にもなるだろう。

最後に、自身の専門領域でいえば、農村のローカルな地平から「虫の目」で見ると同時に、グローバルな地平、すなわち「鳥の目」で自分の立ち位置を見ることは重要な研究の心構えだと思っている。日本のベトナム地域研究がグローバル化のなかで発展し、ネットワークを拡大させるためにも、本図書館が果たす役割は極めて大きい。今後ベトナムに関する所蔵資料をさらに充実させて、研究環境を整えていただければと切に望む。

(いわい みさき/神田外語大学准教授)